

「エルサレムの少年」

ルカの福音書 2:40~52

はじめに

皆さんは迷子になったり、外出先、旅行先で仲間とはぐれたりした経験があるでしょうか。私もそれでそれまでの楽しい雰囲気や、きれいな景色が一瞬にして恐怖や不安になった経験が何度もあります。今日はイエシュアとその両親の間に起こったそのような出来事が記されていますが、決して迷子にならないようにという注意や、仲間とはぐれないための方法などが記されているわけではありません。ましてや同じような自分の経験を思い出し、昔話に花を咲かせるためのものでもありません。聖書はすべて神のご計画について書かれた預言書ですから、今日の箇所からもそれを見てまいりましょう。聖霊の助けがありますように。

1. たくましくなる

ルカの福音書【新改訳 2017】

2:40 幼子は成長し、知恵に満ちてたくましくなり、神の恵みがある上にあつた。

幼子だったイエシュアは成長し「たくましく」なっていったことが記されています。ここに使われている「力強い、強くなる」という意味のヘブル語ハーザク(חֲזָק)は本来、このような意味を持った言葉です。

創世記【新改訳 2017】

19:15 夜が明けるところ、御使いたちは口トをせき立てて言った。「さあ立って、あなたの妻と、ここに居る二人の娘を連れて行きなさい。そうでないと、あなたはこの町の咎のために滅ぼし尽くされてしまいます。」

19:16 彼はためらっていた。するとその人たちは、彼の手と彼の妻の手と、二人の娘の手をつかんだ。これは、彼に対する【主】のあわれみによることである。その人たちは彼を連れ出し、町の外で一息つかせた。

これはその重く激しい罪のために、天からの硫黄と火によって滅ぼされた町ソドムにおいて、当時そこに住んでいた口トと彼の家族を救うために現れた、御使いたちについての記述です。御使いたちは彼らの手を「つかんだ」とあり、ここに聖書で最初のハーザクがあります。「【主】のあわれみ」により、その人の意思に関係なく、たとえこの時の口トのように、その人がためらって、つまり逆らったとしても、滅びの中から強引に「連れ出し」無理やり救い出すこと、力づくでのちを得させることを意味しています。その昔、私と妻が長男の礼をまだ保育所に預けていた頃、ある日電話があり、礼が足に怪我をしたので保育士たちがタクシーを呼び、病院に連れて行き、手当をもらったということでした。保育士たちは「勝手なことをして申し訳ありません」と謝ってきましたが、私はもちろん感謝しました。たしかに保育士たちは礼本人や親の承諾も得ずこのことを行いましたが、これを怒る人が果たしているのでしょうか。このように、神の人に対する救いとは本来、人の意思や行為とは関わりのないものなのです。たとえ子どもが病

院はいやだと言っても保育士たちは連れて行ったことでしょう。また親がお願いしなくても、知らなくても、非常に迅速かつ的確に対応してくれました。救いとはすなわちこのようなものなのです。ですから「[幼子は…たくましくなり](#)」というイエシュアについてのこの描写は、単にイエシュアが人として成長したというような意味ではなく、イエシュアが人の意思や行為などによってではなく、ただ「[【主】のあわれみ](#)」つまり神のご意思、御心、ご計画によって神がお選びになった人を滅びから連れ出す、救い出す、ハーザク、まさに強引に力づくでこれを行われる御方であるということが表された言葉なのです。ちなみに私たち教会が待ち望んでいる携挙も、キリストにある死者をよみがえらせ、その時生きている信者たちをも一挙に天に引き上げてしまうというこの大胆な奇蹟も、神のこのハーザクというご性質の顕著な現れと言えます。

神のハーザク、力強い救いの御業は、聖書の中にいくつも記されていますが、イスラエルにとっての最も代表的、象徴的なそれは、やはり過越しの祭りの起源となった出エジプト記の出来事でしょう。今日の箇所はその過越しの祭りの時期に起こった出来事が記されていますので、まずはこの祭りについて、簡単に触れておきたいと思います。

「過越し」その起源は創世記の時代から出エジプト記の時代にまでさかのぼります。アブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルはカナンのに住んでいましたが、この地に激しい飢饉が生じたため、家族を連れてエジプトに避難します。そこでイスラエルは寿命を全うして死に、彼の息子たち、その子孫たちもカナンに帰ることなく、そのままエジプトに住み続け、さらに子孫を増やしながらか 400 年という年月が流れます。やがてエジプトのファラオはおびただしく増えたこのヤコブの子孫、イスラエルの民を奴隷として扱うようになり、厳しい強制労働を課して彼らを苦しめるようになります。民は神に叫び求め、神は彼らの先祖アブラハム、イサク、ヤコブとの契約のゆえに、これに応え、彼らを奴隷の苦しみから解放し、ご自分の民、神の民として救い出すために、預言者モーセを遣わされます。神はモーセを通して数々の災害、凄まじい天変地異をもってエジプトを打ち、イスラエルを奴隷から解放されました。それを記念とする祭りがこの過越しの祭りです。神は激しい災いでエジプトを打たれましたが、イスラエルの民にはそれが及ぶことなく通り過ぎた、過ぎ越されたために「過越しの祭り」と呼ばれています。詳しくはぜひ出エジプト記をお読みになってください。

しかしソドムから連れ出されたロトの話であれ、そして今日取り上げるこの過越しであれ、すべては過去の出来事ではなく、これから起こる、世の終わりの出来事、終わりの日についての神のご計画を表した「型」たとえです。そしてその中心地となるのが同じく今日取り上げるイスラエルの都、エルサレムです。預言者ダニエル書にこう記されています。

ダニエル書【新改訳 2017】

9:24 [あなたの民とあなたの聖なる都について](#)、七十週が定められている。それは、背きをやめさせ、罪を終わらせ、咎の宥めを行い、永遠の義をもたらし、幻と預言を確証し、至聖所に油注ぎを行うためである。

神のご計画においてイスラエルの民の重要性はもう何度もお伝えしているとおりですが、「[あなたの民とあなたの聖なる都について](#)」とあるように、神は常にイスラエルの民とその都であるエルサレムおよびそ

ここに建てられる宮、神殿をも重要視しておられるのです。このエルサレムについてもその起源を簡単に説明しておきたいと思います。この町はかつては「サレム」と呼ばれていました。

創世記【新改訳 2017】

14:18 また、サレムの王メルキゼデクは、パンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き神の祭司であった。

14:19 彼はアブラムを祝福して言った。「アブラムに祝福あれ。いと高き神、天と地を造られた方より。

14:20 いと高き神に誉れあれ。あなたの敵をあなたの手に渡された方に。」アブラムはすべての物の十分の一を彼に与えた。

「サレムの王メルキゼデク」「いと高き神の祭司」と言われる彼は「パンとぶどう酒」で「いと高き神、天と地を造られた方より」「アブラムに祝福」を与えた人物であり、これはもちろん神の御子メシアであるイエシュアを直接的に指し示す存在です（ヘブル人への手紙 5 章、7 章）。この「サレム(רֶשֶׁם)」を「立てる、置く」という意味で、モーセの律法とも呼ばれるトーラーの語源でもあるヘブル語、ヤーラー(יָרָה)と結びつけた名が、エルサレム(יְרוּשָׁלַיִם)です。今この世界にエルサレムという場所には実際にありますか？ありますね。もしこの名、この町が今日、実際には存在しなかったとしたら、エルサレムとは象徴的な意味として捉え、イエシュアを王とする場所ならどこでも誰のうちでもエルサレムと解釈して良いでしょう。しかしメルキゼデクが現れて以来、この地上からこの名、この町が消えたことは一度もありません。その事実を無視し差し置いて、どこをエルサレムと呼ぶのでしょうか。イスラエルの都、エルサレムは実在の場所、町として存在し続けています。そこにメルキゼデクのような王である祭司、大祭司としてイエシュアがヤーラー、立てられる、置かれる、それがエルサレムとそこに定められた神のご計画です。今日の箇所はそのような神のご計画の中心地、エルサレムについての記述です。

2. 三つのエルサレム

ルカの福音書【新改訳 2017】

2:41 さて、イエスの両親は、過越の祭りに毎年エルサレムに行っていた。

2:42 イエスが十二歳になられたときも、両親は祭りの慣習にしたがって都へ上った。

2:43 そして祭りの期間を過ぎてから帰路についたが、少年イエスはエルサレムにとどまっておられた。両親はそれに気づかずに、

2:44 イエスが一行の中にいるものと思って、一日の道のりを進んだ。後になって親族や知人の中を捜し回ったが、

2:45 見つからなかったので、イエスを捜しながらエルサレムまで引き返した。

2:46 そして三日後になって、イエスが宮で教師たちの真ん中に座って、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。

2:47 聞いていた人たちはみな、イエスの知恵と答えに驚いていた。

2:48 両親は彼を見て驚き、母は言った。「どうしてこんなことをしたのですか。見なさい。お父さんも私も、心配してあなたを捜していたのです。」

過越しの祭りの時期のエルサレムでの出来事が記されています。ここから私たちは何を学ぶべきでしょうか。ユダヤの慣習に従うイエシュアとその両親の忠実さでしょうか。あるいはいなくなった子どもを必死に探す親の愛でしょうか。それも良いかもしれませんが、ここにはエルサレムについての三つの事実、三つの神のご計画が表されているのです。

(1) 旧約のエルサレム

まず一つ目は「イエスの両親は、過越の祭りに毎年エルサレムに行っていた」という記述に目を留めてください。イエシュアの両親はイスラエルの祭りの規定を忠実に守る人でした。しかし彼らが神の御言葉、そのご計画を理解していたかと言えば、この後の記述から決してそうではなかったことがわかります。つまり彼らは、律法を守り行いながらもその霊的な目は閉じ、その心は神から離れていた、律法主義とも呼ばれるユダヤ人たちの「型」です。そして両親は「毎年エルサレムに行っていた」とありますが、ここには旧約の時代から毎年毎年何度も何度も繰り返し行われてきた、エルサレムでの過越しが指し示す、以下のイエシュアの御言葉にある事実が示されています。

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:34 エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。

旧約聖書には、先に述べた過越しの起源だけでなく、神がイスラエルを助け出された奇蹟、御業があふれています。それ自体はみな素晴らしい出来事ですが、裏を返せばそれはイスラエルが事あるごとに神に逆らい、神から離れてしまった結果、神の怒りを買ひ、様々な危機に陥り、結局神ご自身が助け出さなければならぬ、「何度」も集めなければならぬような状況になったということであり、彼らはまさに「何度」も繰り返し神に逆らったのです。そのようなエルサレムの、イスラエルの民の事実がここには「型」として表されています。

(2) 新約のエルサレム

二つ目はイエシュアが「十二歳」の時に行かれたエルサレムです。「十二歳、十二年」という数には本来、「忍耐して仕える」という意味合いがあります（創世記 14:4）。幼子として来られた、初臨のイエシュアは、偉大な王のようではなく、まさに「忍耐して仕える」しもべのように、死に至るまで忠実なしもべとしてひたすら耐え忍ぶその生涯を歩まれました。ゆえに多くのユダヤ人は、この時のイエシュアの両親のようにこの御方を見失った、見誤った、気づかなかつた、理解できなかつたのです。それは何より彼らがただ律法の「慣習にしたがって」いるだけで、それで十分、それで正しく生きて「いるものと思つて」いたためです。しかし実際は真理から遠く離れ、霊的な目はかたく閉じ、聖書に記された神のご計画を正しく理解していなかつたのです。そのような初臨のイエシュアに対するエルサレム、イスラエルの民の姿もまたここには表されているのです。

(3) 終わりの日のエルサレム

そして三つ目は「**三日後**」に両親が見たエルサレムとその宮です。イエシュアを「**真ん中**」にそこにはまさにイスラエルの民が驚くべき光景が表されています。自分たちが十字架にかけて殺した御方がまことのメシアであったという、これを驚かないユダヤ人はいないでしょう。終わりの日に、御霊によってその真実に目が開かれ、激しく動揺するユダヤ人たちの「**型**」がここには示されているのです。イエシュアの両親もまたここでイエシュアを見て「**驚き**」とありますが、ここに使われているシャーメーム(רומם)は本来、「荒れた果てた、荒廃した(土地)」を意味する言葉です(創世記 47:19)。また両親は「**心配して**」ともあり、これはアーツァヴ(אצב)という言葉で、本来はこのように使われました。

創世記【新改訳 2017】

6:5 【主】は、地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった。

6:6 それで【主】は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。

これはノアの大洪水の原因となった記述ですが、これもまた終わりの日の「**型**」です。今はまだ善と悪が混ざり合ったような混沌とした時代が続いていますが、やがて「悪が増大し」すべてが「悪に傾く」時代がやって来ます。戦争や様々な天変地異によって地上はまさに荒れ果て、先に述べたソドムの町のように人の罪が増大します。そのような世を終わらせる、滅ぼすためにイエシュアは来られます。しかしロトの家族のように助け出す、救うべき者を救うためにもイエシュアは来られます。つまりこの「**三日後**」のエルサレムの描写はイエシュアの地上再臨の「**型**」なのです。

そして、以上のエルサレムの三つの側面はそれぞれエルサレムに建てられる三つの神殿とも結びついています。それはすなわち(1)旧約のエルサレムとはソロモンの第一神殿、(2)新約のエルサレムはゼルバベルの第二神殿、そして(3)終わりの日のエルサレムは、やがて建てられる第三神殿を表しています。これら三つの時、三つの日の後、まさに「**三日後**」、神のご計画における壮大かつ究極の「**過越し**」が終わり、神のご計画は完了、完成となるのです。ちなみに先に述べたエルサレムのサレムという言葉には「完成、完了する」という意味もあり、まさにエルサレムは神のご計画の完成、完了を象徴する場所なのです。

3. どうして捜すのか

ルカの福音書【新改訳 2017】

2:49 **すると、イエスは両親に言われた。「どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」**

2:50 **しかし両親には、イエスの語られたことばが理解できなかった。**

この「**どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当然であることを、ご存じなかったのですか。」**というこの御言葉は、このルカの福音書において、非常に重要な御言葉であると信じます。なぜならこの書におけるイエシュアの第一声、この書におけるイエシュアご自身が直接語られた最初の御言葉だからです。イエシュアはかつて終わりの日に起こることについて弟子たちにこう警告されました。

マタイの福音書【新改訳 2017】

24:23 そのとき、だれかが『見よ、ここにキリストがいる』とか『そこにいる』とか言っても、信じてはいけません。

24:24 偽キリストたち、偽預言者たちが現れて、できれば選ばれた者たちをさえ惑わそうと、大きなしるしや不思議を行います。

24:25 いいですか。わたしはあなたがたに前もって話しました。

24:26 ですから、たとえだれかが『見よ、キリストは荒野にいる』と言っても、出て行ってはいけません。『見よ、奥の部屋にいる』と言っても、信じてはいけません。

ですからイエシュアを捜す必要はありません。いや捜してはいけないのです。なぜなら捜すのはむしろイエシュアの方だからです。こう言われているとおりです。

ルカの福音書【新改訳 2017】

19:10 人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。

イエシュアは今、天の御父のみもとにおられ、その右の座におられますが、やがてそこからエルサレムに降りて来られます。上記のこの御言葉を成し遂げるために、再び来られるのです。

4. 心に留めて

ルカの福音書【新改訳 2017】

2:51 それからイエスは一緒に下って行き、ナザレに帰って両親に仕えられた。母はこれらのことをみな、心に留めておいた。

2:52 イエスは神と人とにいつくしまれ、知恵が増し加わり、背たけも伸びていった。

今日の箇所は神のご計画において、イスラエルの民と教会という人、民と同じくらいにこのエルサレムという場所、町の重要性を強調した箇所となっています。私たちが教会とは建物のことではなく、イエシュアを信じる者たちの集まりを指すとは言っている、私はこの会堂、建物が好きですし、これが建てられている北海道という土地が好きです。そのように私たちの神も場所や建物にも非常にこだわっておられることを覚えてください。どうぞエゼキエル書 40 章からの記述を見てください。そこには主がエルサレムにおいて建てようとしておられる神殿の非常に詳細な記述があります。主は確かにエルサレムを、シオンとも呼ばれるこの町を、そしてそこに建てられる宮、神殿を選んで、望んでおられるのです。ですからイエシュアの母のように「**これらのことをみな、心に留めてお**」く人は幸いです。

詩篇【新改訳 2017】

132:13 【主】はシオンを選びそれをご自分の住まいとして望まれた。

132:14 「これはとこしえにわたしの安息の場所。ここにわたしは住む。わたしがそれを望んだから。

132:17 そこにわたしはダビデのために一つの角を生えさせる。わたしに油注がれた者のためにもしびを整える。

132:18 わたしは彼の敵に恥をまとわせる。しかし彼の上には王冠が光り輝く。」

そして今日の箇所のもまた「イエスは…知恵が増し加わり、背たけも伸びていった。」とイエシュアの成長していく様子が記されていますが、ここには「歩く、進む」という意味のハーラフ(הלך)が使われています。これは前回お伝えしたことですが、私たち教会は、神のハーラフ、「歩く」歩まれるその足音、声を聞く存在です(創世記 3:8)。イエシュアが歩まれ、そしてやがて来られるその足音、すなわち御言葉を聞く、そうしてその来られる時に備える、待ち望むことが私たちの生き方、まさに歩み、ハーラフであることを今日も心に留めてまいりましょう。御霊の導きがありますように。